

今日からできる「家庭での交通安全教室」

吉満 莉那

損害保険ジャパン
高松支店 法人支社

はじめに

子どもが道路に急に飛び出して、ヒヤッとしたことはありませんか？

「危ない！」と叱ってもなかなか言うことを聞かないのは、子どもが決して「悪いことをしている」という認識ではないからです。子どもはあらゆることに興味津々で、「好奇心や衝動から動いてしまいます。

子どもたちの輝く笑顔と未来を守るため、まずは身近なご家庭から、「交通安全教室」を始めてみませんか。

子どもの特性を知る

交通安全を伝える上で、まず私たち大人が理解すべき「大切なこと」があります。それは、子どもと大人では「見え方や危険の感じ方」が大きく異なるという点です。

子どもが交通事故に遭いやすい背景には、主に3つの特性があります。

- ① 視野の狭さ：子どもの視野は、大人の「約6割程度」（左右約90度、上下約70度）しか見えていません。
- ② 危険感受性の低さと「認知の自己中心性」：車の接近速度や距離感を正しく空間認識できないことに加え、「自分が車を見えているから、ドライバーも自分が見えているはず・止まってくれるはずだ」という幼児期特有の主観的な錯覚（自己中心性）を抱きやすくなります。
- ③ 衝動性と行動抑制の未発達：興味があるものや大好きな人を見つけると、危険を判断して立ち止まる「心理的ブレーキ（自己抑制）」が働く前に、衝動的に体が動いて「飛び出し」事故につながってしまいます。

「大人が見えているから子どもも見えているはず」という物差しを一度外し、この特性を理解して寄り添うことが安全教育の第一歩です。

日常の中で身に着ける「安全習慣」

では、ご家庭で、まず何から始めればよいでしょうか。大切なのは、毎日の何気ない生活動線の中に「安全なルール」を自然に取り込むことです。

例えば、車に乗る際の「チャイルドシート」の着用や、自転車乗車時の「ヘルメット」の着用は、命を守る絶対の習慣です。「少しの距離だから」と妥協せず、親が率先して着用を徹底しましょう。

また、子どもに安全を促す際は「気をつけて」という曖昧な言葉ではなく、具体的な行動を指示することが非常に有効です。「白い線の内側を歩こうね」「緑のポールの前で一回ストップしよう」など、子どもが迷わず動ける具体的な言葉が、子どもの安全行動をサポートします。さらに、薄暗い時間帯でも車から見えやすくなるよう、衣服やランドセルに「反射材(リフレクター)」をつけることも、ご家庭で今すぐできる極めて効果的な防衛策です。

親子でステップアップする「通学路の練習」

次に、実際の道路を使った「体験型の練習」です。特に小学校への入学を控えた年長さんの時期は、通学路を親子で一緒に歩く絶好の練習機会となります。

ただ歩くだけではなく、「交差点」「信号のない横断歩道」「大型スーパーやアパートの駐車場出入口」など、事故が起きやすい『危険なスポット』に実際に立ち止まってみましょう。

そして、大人の半分ほどの高さである「子どもの目線」までかがんで、周囲の景色を確認してみてください。驚くほど車が見えにくいことに気づくはずです。

「青信号でも、右と左から車が来ないか必ず一度止まって見ようね」「車が止まってくれたら、運転手さんと目を合わせて（アイコンタクト）手を挙げて渡ろうね」と、親子でロールプレイングのようにクイズを交えながら楽しく練習を重ねることが、自立した安全意識を育みます。

さいごに

私たちの暮らす香川県は、交通マナーにおいて危険が多い地域とも言われています。だからこそ、私たち周りの大人が子どもたちに注意を向け、危険を先回りして防いでアプローチしてあげることこそが、子どもたちへの「最大の保険」になり得ます。

子どもは大人の背中を本当によく見ています。家族全員が毎日笑顔で安全に暮らせるよう、まずは私たち大人自身が交通ルールを守るお手本を示し、日々の行動を見直していきましょう。



©JAPAN-DA

*参照：一般社団法人 日本自動車連盟（JAF）、「子どもの視野はどれくらい？ チャイルドビジョン」, JAF 公式ウェブサイト.

<https://jaf.or.jp/common/safety-drive/protect-life/360video/view>

岡本善之. (1983). 「交通事故からみた幼児の心理と行動特性」. 『国際交通安全学会誌』